



カガヤンの傾斜水田

古川久雄*

カガヤンヴァレーはルソン島の東北部に位置する。マニラからは中央平原のやや東寄りを国道5号線で北上する。中央平原は一面の水田地帯だが、稲の作り方は雨期作と乾期作でがらっと変る。雨期作は移植稲が多いが、乾期作は湛水直播が圧倒的に多い。

IRRIのあるロスバニョスから240 km走ると、東西に延びるカラバロ山脈にかかる。ここで中央平原にわかれをつける。ぼこぼこした山の間をさらに40 km走ると峠に至り、その向こうはカガヤンヴァレーである。そこには南から北へヌエヴァヴィスカヤ、イサベラ、カガヤンの3県が並ぶ。それぞれの環境はかなり異なっているが、3県を貫いて流れるカガヤン川でひとつに結びつけられている。湛水直播の波はカガヤンヴァレーにはまだ及んでいない。

ヌエヴァヴィスカヤ県はコルディレラ山脈の東麓にひらけた盆地群に、やや古い水田地帯をかかえている。カガヤン川の支流マガットの水は簡単な石積みみの井堰で分水できるので、ここにはすでに19世紀の末には農民が多くのかんがい組織を作っている。現在もそれらが自主的に運営されている。国営かんがい局は、ここではこうした農民のかんがい組織を支える裏方の役を果たしている。水利面でのこのような安定した基盤に立って、農民は高収量品種と地方種をそれぞれの条件に合わせて選択的に栽培している。現在マトゥナ川かんがいダム建設計画が調査段階にあるが、これが完成すると現行のかんがい組織は水利権の譲渡をせまられるので、かんがい組合連合は大変慎重に対応策を練っている。

盆地群をぬけるとイサベラ県の台地が広がる。ここは1957年に始まったマガット川かんがい計画の受益地帯で、巨大なマガットダムから分水された近代

的かんがい網が年々拡大し、1985年までに10万2千ヘクタールをかんがい地域とする目標を立てている。このイサベラ県にも、山麓部や川沿いの低位段丘には1930年代に始まった農民かんがい組織がかなりの数を算えたが、すでにほとんどのものが国営かんがい組織網の中に統合されてしまっている。そして、稲品種も地方種は姿を消し、高収量品種におき代っている。

さらに北上するとマガット川とカガヤン川の合流点付近でイサベラの台地を下り、水田立地はカガヤン川沿いの低い段丘に移る。この状況はやがてカガヤン県に入っても同様であり、中流域河谷を構成している。この河谷は洪水常襲地帯として有名で、高水時の川幅は低水時の数倍に拡張し、5 kmにも達する部分がある。高水時に川床となる部分は、しかし、低水時には重要な農地であり、とうもろこし、タバコ、ピーナツ、おかぼが一面に植えられる。この地帯の農民の主食は米とひきわりとうもろこしを混合したもので、夏はとうもろこしの比率が高く、冬は米の比率がやや高くなる。カガヤン川からのポンプ揚水によってかんがいが始まりつつあるが、天水田がまだ圧倒的に多く、稲品種も地方種が多い。自然環境順応型の稲作である。

ナシピンの地峡をぬけると、カガヤン下流域に入る。扇状地、自然堤防には水田がひらかれているが、川口近くにはかやつり草の淡水湿地、マングローブの汽水湿地などの未開地が広い。現在、排水とかんがいの工事が行われ、水田の造成が進行中である。

カガヤンヴァレーの水田地帯を要約すると、山間盆地のやや古いかんがい水田地帯、上流域の近代的水田地帯、中流域の自然環境順応型水田地帯、下流域の未開湿地帯と並ぶ。

さて、カガヤンヴァレーは種々の部族が混在することでよく知られているが、上記4地帯の部族構成には顕著な傾向が知られている。1948年のデータに

* Hisao Furukawa, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

よると、下流域、上流域、山間盆地は北部ルソン西岸から移住したイロカノ族が7割以上を占める。逆に中流域ではイロカノは少なく、カガヤンヴァレーの先住部族であるイバナグ、イタヴィスが多い。人類学者の研究によると、19世紀までのイバナグの拡大、19世紀後半から20世紀におけるイロカノの移住というパターンが明らかになっている。ところで、イバナグ、イタヴィスの多く住む中流域は前述のごとく畑作卓越地帯で、またおかぼが最も広く残っている地帯である。このような状況をみると、かつてはイバナグ、イタヴィスらによるおかぼ中心の稲作が、中流域のみならずカガヤンヴァレー全域に行われており、イロカノの移住に伴って水田作が入ってきたと考えられる。イロカノの卓越する山間盆地、上流域はかんがい水田をひらき易い立地にあることが、この推察の傍証となる。もうひとつの傍証が、この小文の題目にとりあげた傾斜水田の存在である。

カガヤン中流域の水田は平地のものでも多少とも傾斜している感じを受けるが、枝谷に入ると、これは、と驚くような傾斜水田にお目にかかる。ここで述べる例は、カガヤン県都のトゥグエガラオから北へ35 km 行ってバイバヨグの町を東へ入るパレット川沿いの支谷にみられる。バグガオをすぎて低い丘陵性山地はすすき、ちがや、やぶにおおわれ、時にバナナ、でいご、マカラングなどの立つ焼畑跡地も多い。その谷底には谷地田が続く。谷地田の両側は低い棚田になる。それと丘陵斜面の間には崩積性の斜面があり、その上部はとうもろこし、緑豆、タバコ苗などが作られている。そして、その下部に傾斜水田が作られている。

この水田は要するに一筆が平坦ではなく、山成りの起伏、ゆるい勾配がそのまま残っている。一筆の下端部には低い畦を作るので、低みには水がたまるが、上の方は乾いている。7月ごろに第1回目のすきおこしを行い、10月までに3回くり返す。11月ごろにまぐわをかけ斜面の陸苗代から苗をとり、手で移植する。品種は地方種が多いが、最近では高収量品種も植える。2、3月には収穫し、5月にとうもろこしをまく。つまり今度は畑として利用する。

畦近くの雨水のたまった部分は、まぐわでしろかきをすることが可能だろうけれども、水のたまらない部分はどうするのかと聞くと、やはりまぐわをかけるという。この付近での雨量のピークは10、11月

にあり、月間300 mm をこす雨が降るので、高みでもかなり湿土状態になると思われる。われわれの想像するしろかきの状態にはならないまでも、砕土、ねり返し、草抑えとしては効果があろう。稲をみると、たまり水のある部分では青々と元気がよいが、乾いた部分では黄色く、窒素欠乏状態を示す。

この傾斜水田の古さを聞くと、7年とか15年という。傾斜水田の状態はすぐに消去されるのではなく、かなりの期間継続するわけである。平坦にする方がよいことは判っているのだが、それは大変だから当分このまま続けるという。要するに、崩積斜面下部で、雨が降ると少し湿るような部分に、傾斜水田が位置する。移植法について確かめると手で移植するという。これはこの部分がすでに常畑に変化していたことを示す。何故かという、この付近の焼畑地では必ず植え棒で植えることと明瞭に異なっている。

結局、まわりの土地利用と考えると、焼畑(陸稲)→常畑(陸稲)→傾斜水田(陸稲・水稻遷移型)→棚田・谷地田(水稻)という変化系列を辿ることができる。少し誇張すると、水田へのこのような変化はイロカノの移住が引金となってカガヤンヴァレー全体に波及したが、それ以前は陸稲卓越の稲栽培だったのではなかろうか？

イサベラの平坦な台地地帯は現在ルソンの穀倉となっているが、そこでも一面の水田化はごく最近のことであり、1940年代までに水田化が完了していたのはマガット川寄りの低位段丘のみで、その東の中位段丘はまだ一面のすすき原であったらしい。そこにカリング族が火をつけて1日に何 km も焼き払い、植え棒で粃を点播しておかぼを作るという状態だったという。イロカノの移住者も移住当時はそういう栽培法を行なったようだが、数年にして畦を作り、たまり水で水稻を作り、1950年代の後半からかんがい稲作に切り替ったという道筋である。

カガヤンヴァレーの農民が肥沃な土地としてまず頭にえがくイメージは、元来平坦であり、水をためるのが容易な土地である。このことは、前述した傾斜水田を平坦にするのは大変だという見方と裏返しの関係にある。平坦な水田が当りまえと思っているわれわれの発想とは全く異なる。カガヤンの傾斜水田はきわめて新しい水田地帯の象徴といえる。(京都大学東南アジア研究センター助教授)